

戦場の記憶を継承するために

― 田村泰次郎「ある死」「肉体の悪魔」 ―

尾西康充

1

中国大陸における五年三ヶ月におよぶ従軍体験を持つ田村泰次郎は、復員後まもなく、山西省を舞台にした「肉体の悪魔」(「世界文化」、一九四六年九月)を発表している。本稿では、泰次郎の代表作といえる「肉体の悪魔」の分析を通じて戦争文学のテーマに論及しようと考えているのだが、その前提として、泰次郎が三島由紀夫と競作して「文藝」第一二巻九号(一九五五年七月)誌上に発表した、二人の作家のきわめて個性的な作品に着目して戦争文学の描き方を検討してみる。

「文藝」第一二巻九号は「夏の小説まつり」特大号と銘打って、巻頭には梅崎春生「紫陽花(第一部)」が、続いて室生犀星「ワシリイの死と二十人の少女達」、上林暁「父母の膝下」が掲載されている。さらに「掌篇小说十人集」という特集には、井伏鱒二「手洗鉢」、三島由紀夫「牡丹」、吉行淳之介「軽い骨」、安部公房「棒」、源氏鶏太「三界に家なし」、小山清「旅上」、北條誠「鳥影」、丸岡明「ひめむねたゞ」、田村泰次郎「ある死」、尾崎一雄「蟻・蜂・蜘蛛」が掲載され、かつて作家が文士と呼ばれた小説全盛時代の空気が感じられる。本稿で取りあげる三島由紀夫「牡丹」と田村泰次郎「ある死」は、ど

ちらも戦争犯罪と人間の根源的な(悪)をテーマにした短篇小説で、発表当時の日本社会は敗戦後一〇年が経とうとし、朝鮮戦争はすでに停戦協定が結ばれ、前年には自衛隊法が国会で可決されていた。

三島の「牡丹」は、語り手「私」が「職業も居所も不明で何かの政治運動に携はつてゐるといふ風評」の友人草田に誘われて、「桂ヶ岡牡丹園」の見学にでかける。園内で牡丹を見学していると「一人の見すばらしい身装をした老人」が通りすぎる。草田によれば、「つぎはぎの縞のワイシャツに、裾のすばまつた軍隊ズボンを穿き、色の剥けた紅い鳥打帽子をかぶつて」地下足袋を穿いているこの老人は、「南京虐殺の首謀者と目された男」として「有名な川又大佐」である。「戦犯の罪状には、彼の責任をとるべき虐殺が、数万人に及んで」いたのだが、「とうとう身を隠して、戦犯裁判から逃げとほし」、「もう大丈夫となると、姿を現はして、この牡丹園を買ひとつた」という。しかし「本当のところ、大佐がたのしみながら、手づから念入りに殺したのは、五八〇人にすぎなかつた」というものの、実は「それがみんな女」ばかりで「大佐は女を殺すことにしか個人的な興味を持たなかつた」という。

この持主になってから川又は牡丹の木を厳密に五八〇本に限定した。手づから花を育てて事実牡丹園はこれだけの成果をあげてゐる。しかしこんな奇妙な道楽は何だと思ふ？ 俺はいろいろと考へた。今では多分かうだろうといふ結論に達してゐる。

あいつは自分の悪を、穩密な方法で記念したかつた。多分あいつは悪を犯した人間のもつとも切実な要求、世にも安全な方法で、自分の忘れたい悪を顕彰することに成功したんだ。

草田によれば、牡丹の木が「厳密に五八〇本に限定」されているのは、川又の「奇妙な道楽」によるもので、自分が殺した数の女性と同じ数の牡丹を育てることによって「自分の悪」を「穩密な方法で記念」しようとし、「悪を犯した人間のもつとも切実な要求」を満たすために「世にも安全な方法」で「自分の忘れたい悪を顕彰することに成功」したのだという。五八〇人も中国人女性を「手づから念入りに殺した」川又が戦犯として訴追されることから必死に逃れようとしただけではなく、安全になると誰からも分らないように「自分の悪」を「顕彰」しようとしている「悪」の権化とも呼べる人間が描かれたこの小説で印象的なのは、園内の牡丹が「一体に盛りをすぎ」ていることである。

雪月花といふ名の牡丹は、白ちりめんの花弁のうちに、ほとんど金色の蕊を護つてゐた。それぞれその牡丹に個性があつた。眺めわたすと、そこかしこに立つたりしやがんだりしてゐる見物客の姿が邪魔であるが、黒い土のうへにひとつひとつ重たい

影を落としてゐる牡丹は、満開の草花の花園などとはちがつて、一本一本が土のスペースに囲まれて孤独に見え、全体の印象は、沈鬱に感じられた。見事にひらき切つた花も、木が低くて、それに比して花ばかりが大々としてゐるから、きのふまでの雨に湿つた土から、じかに咲き出たやうな気味のわるい生々しさがあつた。

それぞれの花には「個性」があるのだが、満開の時期を過ぎていることもあつて「黒い土のうへにひとつひとつ重たい影を落としてゐる牡丹」は「一本一本が土のスペースに囲まれて孤独」に見え、全体として「沈鬱」に感じられた。花の大きさに比して木が低いために「きのふまでの雨に湿つた土から、じかに咲き出たやうな気味のわるい生々しさ」があるという。この「沈鬱」な「気味のわるい生々しさ」は、南京で犠牲になつた女性の決して癒されることのない魂を彷彿とさせるのだが、三島は「沈鬱」な「気味のわるい生々しさ」と表現するだけで、犠牲者がいかに無念の裡に自己の生命を奪われたかということには思いを及ぼさない。そこには〈悪〉を〈美〉によつて昇華させるという文芸思潮上の悪魔主義の手法がみられ、三島が考えたように言葉によつて織りなされる文学的的世界がそこで自律的に存在するかのよう思われる。だが〈南京〉にはナシヨナリズムの思惑によつて引き裂かれた言説の歴史的空間があるだけでなく、安らかな眠りに就くことのできない死者の闇が広がっている。南京市内江東門の万人坑遺跡には、頭蓋骨があばら骨のうえに見つかつた六〇歳の女性、両側の脛と肋骨、ふくらはぎの骨の間、右肩胛骨に鉄釘を打たれていた九

歳の児童、頭蓋骨の両側に鉄釘を打たれ骨盤の右側に刀傷の痕がある一九歳の女性など男性六三名、女性一七名の遺体が一九九八年に発掘されたときの状態のまま展示されている。言葉では決して表現できない闇の前には、厳粛な気持ちでたたくむ他はない。

2

田村泰次郎の「ある死」は、現役の古年兵伊勢田一等兵が「みじめな死に方」をしたことからはじまる。「中隊の暴れ者」の伊勢田がそのような死に方をしたことを戦友は可哀想には思ったが、彼ならば「仕方がないという気持」が「しないでもなかった」。伊勢田はいつでも上等兵になれそうにないほど「戦地でいろんな悪業」を重ねていたからである。

単に、上官の命令に服従しなかったり、勤務をずるけたりするというだけでなく、討伐や作戦に出ると、その土地の住民を殺したり、女に暴行したり、住民の財物を掠奪するのが、みんなの眼にあまつた。暴行や、掠奪はなにも伊勢田だけにかぎったことではないが、彼の場合はそれをおおつびらにやつてのけ、敵の兵隊と住民との区別がなく、すぐに殺戮をほしいままにするのだ。一つには、それがいつまでも自分を進級させない、中隊の幹部に対する、面当てであり、もう一つは、同輩に対する示威であつたようだ。

「その土地の住民を殺したり、女に暴行したり、住民の財物を掠奪する」伊勢田の行動が「みんなの眼にあまつた」のは、「暴行や、掠奪はなにも伊勢田だけにかぎったことではない」が、彼の場合はそれを「おおつびらやつてのけ」とともに「敵の兵隊と住民との区別がなく、すぐに殺戮をほしいままにする」ためであつたという。伊勢田に限らず他の日本兵のなかにも国際法を無視した行動のあつたことがさりげなく書かれているのに驚かされるが、それ以上に、彼の無法ぶりが自分をいつまでも進級させない「中隊の幹部に対する、面当て」とともに「同輩に対する示威」を目的にしていたところに彼の異常さを感じられる。犠牲者の立場になって状況を考えることのない自己中心的な、しかも階級が進まないことコンプレックスに対する反動として、自分の強さを上官にも戦友にも誇示しようとしている。だが自己顕示欲と同時に、伊勢田を見れば、常軌を逸した行動をとつた兵士は精神的に異常を来していたという個人的な問題だけではなく、階級の間で差別がある軍にはそれを発症させる条件が揃っていたという組織の問題のあることが分かる。

伊勢田は「山西省の太行山脈の奥深い名もない部落」で「国府軍の奇襲隊」に攻撃されて落命した。「国府軍」とは国民党中央政府軍の略称である。伊勢田は最初は行方不明になったといわれ、敵軍の捕虜になったのではないかと心配されていたが、三日後に死体となって発見された。部隊の出發まで時間がなかったため、大急ぎで火葬することになった。彼の軍衣のものを入れを調べると「よごれて、折りたたんだふちの毛ばだった一枚の紙」が出てきた。

「おや、これは、凄えや」

それを受けとつて、ひらいてみた下士官が、にやにやと笑つた。私たちは、下士官の手もとをのぞきこんだ。

「班長殿、なんですか？」

私たちは、班長のひらいた極彩色の絵を見て、ぎくりとした。

それは浮世絵風の春画の下手な模写だった。魔除けのために、そんな絵を所持したりすることは、必ずしもないではないが、いま、伊勢田のくさりかけた死体から、毒々しい色彩のそんなものが出てきたことが、なにか異様な感じだった。

「奴さん、こんなもの持つていても、弾丸除けにならなかつたな」

お守り札や、そのほかの所持品は、遺留品として、別にしたが、その絵は、そのとき、火がついて、ぱつと赤い炎にかこまれた伊勢田の死体の胸の上に、ふわりと戻された。めらめらと、炎の舌が、その絵に燃え移る。むきだしの白い女のふとももや、そのふとももにからんでいる毒々しい紅さの腰巻のしわが、炎のなかで、一瞬、ゆれ動いているように見えた。

伊勢田の軍衣から発見された「極彩色の絵」は「浮世絵風の春画の下手な模写」だった。弾丸除けの護符として春画を雑囊に入れる兵士もいたが「くさりかけた死体」から「毒々しい色彩のそんなもの」が見つかったことは「なにか異様な感じ」がしたという。遺留品を別にして茶毘に付すと「炎の舌」がその絵に燃え移って「むきだしの白い女のふともも」や「毒々しい紅さの腰巻のしわ」が炎のなかで「一瞬、

ゆれ動いているように」見えたというのは、泰次郎が得意とした官能的な描写の一つであるが、厳しい軍紀と差別的な階級制度にしばられ、つねに敵の攻撃にさらされている兵士たちは、ともすれば性衝動を倒錯させてしまう。人間が本能的に持っている自己保存の欲求は生命が危険におかれるほど昂じるために、また人物を造形する際にヒロイックな性格とロマンスは大衆受けするために、文学作品における戦場と性の親和性が生まれる。

この後、部隊は再び太行山脈に分け入り、伊勢田の遺骨の一部は兵士の飯盒に入れられて運ばれた。しかし兵士たちはみな「自分の身体を持ちあつかうだけ」が「やつと」で「きりたつた峰や、底知れぬ深さの絶壁との闘い」に「精一ぱい」だったので、伊勢田の遺骨は「中隊の誰からも気にかけれなかつた」。一ヶ月が過ぎ、部隊は作戦が終わりに近づき鉄道沿線に出ることになった。すると下士官は急に兵隊に対して「手ごろな箱」と「白いきれ」を探してくるように命じた。

白布につつまれた遺骨箱が一つでも、多いことは、その中隊がそれだけ山のなかで、奮戦してきた証拠である。一つも遺骨箱のない帰還は、なんとなく、ひげ目を感じる。これまで、山のなかで、幾十日も誰からも気にもかけられなかつた伊勢田の遺骨は、急にみんなから関心を持たれはじめた。明日の鉄道沿線への中隊の帰還は、伊勢田の遺骨を中心に、行軍の序列がきめられた。

「白布につつまれた遺骨箱」の数は、中隊が奮戦してきた証拠とさ

れるので、「一つの遺骨箱のない帰還」は何となく「ひけ目を感じる」ことになる。「山のなかで、幾十日も誰からも気にもかけられなかつた伊勢田の遺骨」に急に関心が持たれはじめたのは、中隊にとつて、過酷な戦闘に耐えてきたことを証明できるものが遺骨箱以外になく、下士官が戦功を誇示するためにも、兵士たちが「日本の居留民」からねぎらいの言葉をかけてもらうためにもまた遺骨箱が必要とされたからである。

翌日、私たちは、白布につつまれた遺骨を中心に、肅々として、県城にはいった。県城には日本の居留民たちが、城門のそとまで出迎えていた。居留民たちは、二列に並んでいた。男たちは国防服と巻脚絆に身を固め、女たちはそろいの白い上つぱりに、国防婦人会と書いたタスキをして、私たちを待っていた。

「苦勞さんでした」

団長がそういうと、彼らは一せいに、私たちにむかつて、頭をさげた。

遺骨箱がくると、なかには、手をあわせる者さえあつた。

鉄道沿線にある県城では「日本の居留民」たちが中隊を出迎え、団長の言葉に合わせて一同が頭を下げた。彼らのなかには遺骨箱に「手をあわせる者さえ」いたという。その箱に入っているのは、生前に暴行や掠奪のみならず兵隊と住民の区別なく殺戮をおこなっていた伊勢田の遺骨であり、しかも戦闘中はその箱の存在がすっかり忘れられていたことを考えれば、遺骨箱に手をあわせることには違和感を覚えず

にはいられない。だがたえず生命の危険にさらされて虚無的な心境におちいつていた兵士たちにとって、「日本の居留民」からねぎらいの言葉をかけてもらい、頭を下げてもらうことは彼らの荒廃した心に潤いをもたらした。

中隊が県城に入ると伊勢田の遺骨箱は県城の兵站宿舎の下士官室の棚に安置された。一泊して駐留地に汽車で出発する準備をするために、下士官はビールの空箱を壊して新しい遺骨箱を作ろうとした兵士たちに、「英霊」に供える酒と果物を炊事場からもってくることを命じ、語り手の「私」には遺骨箱が「ひきたつ」ように一番白いきれを街で買ってくるように厳命した。まるで遺骨箱の「威光」にますます依存するかのような振る舞いは、太行山脈の奥深くにあつて、何のために誰のために自分たちが闘い傷ついているのか分からないという虚無的な心境を癒すためであり、精神の苦痛は人間の関係性を通してのみ快復されることを再認識させられる。伊勢田の悪辣な行動が上官や戦友に対して自己の存在を誇示するためになされたものであったことを思い返しても、過酷な戦場におかれた兵士たちが日常の関係を絶たれて人間性を失うという絶望的な状況が理解できる。だが本作品からは、たとえ生前どのような人間であっても戦没者は等しく追悼されるべきであるとする「英霊」の考え方に違和感を覚えさせ、戦没者を「英霊」として集合化するのではなく、兵士たちの従軍生活の個別の相と固有の体験にこだわることの大切さが伝わってくる。

3

田村泰次郎の代表作「肉体の悪魔」は、一九四六年二月に復員して

四日市東富田の兄正衛の許に仮寓していた泰次郎が、戦後はじめて上京した折に、「世界文化」の水島治男編集長に勧められて執筆した小説である。郷里に戻って約一〇日間で書きあげられ、「世界文化」(一九四六年九月)に掲載された。黄塵の吹き荒れる山西省の太行山脈を舞台として、宣撫班に属する旧日本軍の一兵士と中国共産党軍の俘虜張沢民との間で愛憎劇が繰り広げられる。主人公の「私」は張との信頼関係ができて彼女の愛情をたしかめられたと思っていたが、「前線の日本軍憲兵隊の密偵」をしていると自称する中国人が張の秘密を暴露し、その情報が不確かなものながらも大いに動揺させられる。その矢先、張を連れて「七里屯といふ山裾の部落」に調査に出かける。中国共産党の抗日根拠地が近くに点在する村落において、住民のなかに中国共産党の工作員が潜んでないか、住民が日本軍に協力的であるか、などの情報を常時得ておくことは占領地の治安を維持するために重要なことであった。その日もまた「私」は附近の地形と治安を偵察するために村公所で村民を訊問していた。しばらくすると張の姿が見えないのに気づく。「私」には「何か直感があつた」という。表に飛び出したが彼女の姿は見えない。「張先生、——」と大声で叫んでみたが何の反応もない。急いで裏口へまわると、裏山を登ってゆく後ろ姿が見えた。「私」はもう一度名前を呼ぼうとして止めてしまった。

君は私を捨てて行く、——ああ、私は捨てられる、いま、捨てられるのだ——私がかつとなつた。君に裏切られたといふ意識だけが、私の頭のなかに溢れだして来た。足もとがぐらぐらとゆれるやうに思へた。私はめまひがした。

「私は捨てられる」と思って「かつとなつた」。張に「裏切られたといふ意識」が「頭のなかに溢れだして来」と「足もとがぐらぐらとゆれる」ように感じて「めまひがした」という。相手に逃げられて怒りがこみ上げること自体は愛情関係において一般的なことだが、この場合、「私」にとっては愛情が結実したように思えても、俘虜の立場にあつた張は、軍によってつねに監視され支配されていたことを忘れてはならない。両者が決して対等の関係になれないことに作者の泰次郎が気づいたのは、敗戦後に武装解除されて北京市近郊にある豊台捕虜収容所に入ってからであった。¹⁾当初は暴力が顕在していたが、管理が進むとやがて支配は内面化されて、目に見えない権力関係に変容するために、〈支配される側〉は暴力の痕跡を簡単に忘れてしまうのに対し、〈支配される側〉は暴力の起源を決して忘れることがない。ひとたび〈支配される側〉がそれを呼び覚まそうとすると、〈支配する側〉は不意をつかれて動揺し暴力をよみがえらせる。これと同じように張に逃げられようとした「私」は、咄嗟に拳銃を構えて彼女に照準を合わせるのである。

私は、何故さうしたのか、そのときも、いまもわかつてある、——私は装填した拳銃をとりだすと、安全装置をはづした。三十米ある。私はあたりをすばやく見まわして、手ごろな岩角を見つけると、駆け寄つて、銃身をそこにあてて照準した。発射による銃身の震動を避けようとしたのだ。四十米——私は引金をひかうとした。——そのとき、君はくるりとこちらへむきを

かへると、じつと私の手もとを見てゐるやうだったが、まもなく駆け降りて来た。私は呆然として君を見てゐた。君は物凄いききほひで私の方へ飛び込んで来た。そして、いきなり泣きはじめた。さつき私が君の名を呼んだので、みんなが出て来たが、君が泣いてゐるのを見て、へんな顔をしてゐた。それまでに私は拳銃をしまつてゐたからよかつたが、そうでなかつたら、ちよつとその場の説明は出来なかつたにちがひない。

右は、引き金を引くかどうか「私」が瞬時の判断を迫られた、作品のなかで最も緊迫した場面である。振り返つて「私」の行動に気づいた張は、裏山を駆け降りて「物凄いききほひで私の方へ飛び込んで」きて「いきなり泣きはじめた」という。泣いてみせることによって自分が逃亡しようとしたことを償おうとするのは、大衆文学的な「お涙頂戴」の女性の姿であるといえよう。ここで発砲してしまうと、それまで「私」が彼女に対する愛情を通じて〈支配する者〉と〈支配される者〉との関係を乗り越えようとした努力が水泡に帰してしまう。しかし作品のクライマックスに女性の涙を登場させて、物語の破局を一時的に回避させたのは無理があるといえよう。なぜなら張は私に対して「日本帝国主义は私たちの永遠の敵」だというセリフを三度口にしてゐる。一度目は福星劇団の事務所ではじめて口をきいたとき、つぎに肉体関係を結び「私」が彼女のベッドにゐるとき、そして部隊が移動するのにもなつて両者が別れる前夜に告げている。つまり「私」への愛情とは無関係に、彼女はこの認識を変えることはなかつたのである。

ところで「肉体の悪魔」自筆原稿は、四日市市立博物館に保存されている。B4判四〇〇字詰原稿用紙（縦二〇字×横二〇行）七三枚に黒ペンで書かれた草稿段階の原稿には、右の場面がつぎのように記されている。

引金をひかうとした。——そのとき、突然君の姿が空間から消えた。轟然とした音響があたりの空気をふるわせた。彼女が倒れたのが見えた。私はそこへ駆けだして行つた。

君は片肘を地について、私を見あげてゐた。左の上膊に血が真赤に噴きだしてゐた。

「幹甚麼？」

私はどなった。君が私にくれた言葉が、私の頭の中でいつも生きてゐたのが、とつさにとびだした。私はありつただけの愛情で、君を憎んだ。——さういふ私を、君は見た。

君はそして、かすかに軽蔑したやうな影を唇のあたりに浮かべて、微笑んだ。私はぞつとした。

猿江や、工作員や、特別工作隊の者たちが、銃声を聞いて走つて来た。私は君を抱いて、創口を押へながら、私はさういふ連中に叫んでいた。

「暴発だ。——暴発だ。何でもない、何でもないんだ。」

自筆原稿では拳銃が発砲され、張の左上膊部に銃弾が命中し出血する。咄嗟に「幹甚麼？」と怒鳴つた「私」を見て、張は「かすかに軽蔑したやうな影を唇のあたりに浮かべて、微笑んだ」という。このよ

うな張の表情は、作品冒頭の一九四二年夏の「晋冀豫省境作戦」で俘虜になった張をはじめて目撃したときと同じものであった。河沿いの村で休憩していたときにも張は「日本軍に対して骨の髄から憎悪に燃えてゐるやうな冷やかさを全身に見せ」ていたし、作戦行動中に夥しい数の日本軍の負傷者に囲まれていたときにも「眼の光や、そのすこし分厚い唇のあたりには、意識的な皮肉なつめたさが漂つてゐる」ように思われた。「私」が彼女に「皮肉なつめたさ」を感じたのは、「私」の内部にある「戦争そのものの根元的な罪悪に対する人間らしい否定」を自分の外部に具体化して「私自身とむかひあわせてみたい」と考えたからかもしれない。これらは彼女の気持ちとは無関係な「私」の一方的な願望であつたにせよ「戦争そのものを否定する一つの原型的な人間像」を彼女に見出そうとしていたのである。

だが「私」がいくら否定しようとしても、張は「私」によつて「支配される側」の人間である。「私」が暴力の痕跡を忘れようとしても、彼女は暴力の起源を決して忘れることがない。それが呼び覚まされようになつたとき、「私」が「ありつたけの愛情で、君を憎んだ」とアンビバレンツを感じたのは、両者の認識の根本的なズレによるもので、彼女に対する愛情を感じていながらも憎悪が生じるのを抑えることができなかったからである。他方彼女は、逃亡しようとした自分が振り返つて戻つてきたのはなぜかを、「私」と別れる前夜に告白する。

「あの日は、あなたの弾丸に当つて死ぬつもりだつたのよ、
ああすれば、あなたが私を射つことがわかつてゐたわ、——何
故、死なうとしたかつて？ あなたが私を憎んでゐることを知

つてゐたのよ、だけど、あなたの弾丸にあたつて死ねば、あなたを可哀さうに思つてくれるにちがひないと思つたの、
——そんな夢をみたかつてのよ、——だけど、あなたのおんまり真剣な顔を見たので、私はまた急に生きてゐなくなつたの、
死んでしまつたら、あなたのこんな顔見られないと思つて」

張によれば、「私」が自分を憎んでいることを知っていたから、弾丸に当たつて死ねば「可哀さうに」思つてくれるにちがひないと考えた。だが「私」の「あんまり真剣な顔」を見たので「また急に生きてゐなくなつた」という。これはたとえその場で自分が殺されても、もはや愛情に転じることがないほど「私」の憎しみが強いと判断したからである。ここにはひとたび暴力を介在させてしまえば、人間はお互いの存在を決して理解しあうことができないということが示されている。その一方、同じ夜に張は「私」に好感を抱いた理由も説明している。

「どうして、あなたを最初好きになつたかつて？ それはあなたが中国人を馬鹿にしないからだわ、私が来た頃、あなたが老百姓と何かのことで話してゐるのを見てゐて、とても感じよく思つたことがあつたのを覚えてゐるわ」

「老百姓」とは日本語の「庶民」という意味で、右の説明から張は、民族や階級で人間を差別しない「私」となら、たとえ敵軍の兵士であっても心を通じ合えるかもしれないと感じていたことが分かる。泰次

郎もまた駐屯地では中国人の子(子ども)たちと仲良くし、野菜や果物を運んもらっていたようである。³⁾ また張には彼女のモデルになった朱愛春という名前の中国人女性がいたことが判明しており、泰次郎が彼女との交歓の日々を送ったことも事実であったと思われる。³⁾ しかし「七里屯」の事件が実際にあつたかどうかは不明であるし、泰次郎自身は彼女の実名が「張玉芝」であつたと信じていたが彼女は実名を明かさなかつた。野田正彰氏によれば、泰次郎は「閉塞された時代のなかで、違和感を持ちながらそれなりにうまく適応し、男女の感情の機微にしか真実はないと思ひ込んで」いたために、「男女の感情の機微なるものが、どのような社会、教育、制度、暴力から作られたものか、分析する知性」を持たなかつた。だがそのことによつて逆に泰次郎の作品を読めば、女性を監禁して慰安婦にした旧日本兵たちが「いかに幼稚な女性観と自己像しか持っていなかつたか」が分かるという。⁴⁾ 張に対する「私」のアンビバレンツな感情と両者のズレは、野田氏が指摘するように根本的な「幼稚」さにもとづいたものと考えられるのだが、一般兵士のなかでも他と比較して良心的にふるまおうとした泰次郎でさえ、自分が日本軍男性兵士であることの暴力性に対する認識が浅く中国人女性を本当に理解し得なかつたといえよう。

4

「肉体の悪魔」の結末では、張は機関車の石炭の上に寄せられる。「普段着の藍色の衣服」を着て「ほかの住民たちにあつて、ちよこなんと座つた君の姿は、極めて普通の娘」だつたとされる。泰次郎が配属されていた独立混成第四旅団は、一九四三年五月に第六二師団に編

成替えがおこなわれ、一九四四年一月には大本営陸軍部から「敵特二第一戦区軍主力ヲ撃破シ黄河以南南部京漢鉄道沿線ヲ占領確保」する「京漢作戦」の要綱が示された。「第一戦区」とは華北地方に展開する国民党中央軍で、湯恩伯副長官指揮下の部隊は精鋭として知られていた。泰次郎の独立歩兵第一三大隊は京漢作戦がはじまるまでは山西省の省都太原の治安警備を担当しており、作品にも「山西特有の寒い空つ風の吹く日、私たちは君を城外にある駅」まで送つていったと記されている。京漢作戦では泰次郎の部隊は「欠除部隊」として後方に回されて、黄河の北にある河南省新郷に集結することが命じられていたので、作戦命令が発表されると太原から榆次に移動して石太線沿いに東に移動し、途中で向きを変えて京漢線沿いに南下して新郷に到着した。⁵⁾ 当時「道清鉄道」は新郷で京漢線と交差して河南省内を東の滑県の道口から西の清化県(今の博愛県)まで走っていた。おそらく張は故郷の清豊県に帰るために、その鉄道の列車に乗つたと思われる。張は太原から列車を乗り継いで、あるいは新郷から直接「道清鉄道」に乗つて故郷に帰つたと思われる。劉徳潤河南師範大学外国語学院教授によれば、中国解放後にその鉄道は取り壊されたが、いま倉庫として使われている昔の新郷駅の駅舎に、道清鉄道の字がまだ読みとれるという。このように考えれば張は生きて故郷の地を踏めた可能性が高い。

しかしかりに張が生きていたとしても戦後の生活はどうであつただらうか。中国共産党の反右派闘争や文化大革命に際して、彼女はたとえ一切スパイ活動をおこなつていなくとも対日協力者として厳しい糾弾を受けたにちがいない。日中戦争で被害者であつた中国人が自

分の記憶を証言しづらい状況が生まれていたのである。笠原十九司氏は、中国人から南京事件の証言を聞き出すことがむずかしかったことをつぎのように説明している。

抗日戦争に勝利し、中国革命を遂行した中国では、中国人の生きかたを、抵抗したか屈服したか、愛国か売国か、革命か反革命（反動）かなどと二元的に判定・評価する傾向が現在でも強い。反右派闘争期や文化大革命期には、そうして判定・評価された人々の政治的運命や生命さえも左右する結果になった。

そのような中国社会の歴史において、南京事件の被害体験者は、抗日戦争勝利という立場からは、日本軍占領下の南京で生活した「抵抗しない」「戦わない」「投降した」「亡国奴」の人たちであり、汪精衛傀儡政府の下で生活していた「売国的」「国賊的」な人たちであり、中国革命に勝利した共産党の立場からは、蒋介石国民政府下で生活していた「反革命」「反動」の人たちと見なされてきたからだ⁶⁾。

戦後の厳しい時代、朱愛春は政争の混乱のなかで逮捕・投獄されたと思われ、再び囚われの身になって泰次郎との交歓の日々を懐かしく想うときがあったかもしれない。他方、泰次郎は自分の戦場体験にできるだけ忠実な小説を執筆することに努めた。家永三郎は『太平洋戦争 第二版』（一九八六年一月、岩波書店）の「第九章『大東亜共栄圏』の実態」のなかで泰次郎の小説「裸女のいる隊列」を紹介し、厳寒の太行山脈のなかを朝鮮人慰安婦が裸で行進させられている光景

が「事実の描写と見てよい」のは「作者に直接照会して得た回答による」と注記している⁷⁾。泰次郎は自分の従軍体験を忠実に再現しようとするが、戦場の光景を一層リアルに描くためにデフォルメして小説を創作していた。

成田龍一によれば、歴史家の方法は「固有の体験の固有の記述から出来事の狭義の『事実』を切り取り、束ね、ひとつの歴史像とする作業であり、人々の体験／証言／記憶を集約することによって『客観化』しようという営み」であるがゆえに「体験者の固有性やそれが当事者にもつ意味の喪失と引き換え」になる一面も生じるという⁸⁾。論理の「客観化」というのは、いかなる学問にも要求されるものだが、「体験／証言／記憶」が持つ「固有性」や「意味」へのこだわりは、とりわけ文学の研究領域であり、細部へのこだわりを強めることから新しい解釈が生まれることが多い。戦場の記憶を継承するために歴史学と文学の研究領域を横断して泰次郎の文学を読み深めてゆく作業が必要とされるであろう。

注 三島由紀夫「牡丹」と田村泰次郎「ある死」の本文は「文芸」第一二巻八号（一九五五年七月）、泰次郎「肉体が悪魔」の本文は『田村泰次郎選集』（二〇〇五年四月、日本図書センター）に依拠している。

(1) 「田村泰次郎の自筆原稿」（拙書『田村泰次郎の戦争文学—中国山西省での従軍体験から』所収、二〇〇八年八月、笠間書院）を、ご覧下さい。

(2) 田村美好氏の証言。

(3) 「肉体が悪魔」研究」（前掲『田村泰次郎の戦争文学—中国山西省での従軍体験から』所収）

(4) 野田正彰「虜囚の記憶を贈る 山西省太原の日本軍性暴力」（『世界』

- 二〇〇八年一〇月、三二二～三三三頁)
- (5) 防衛庁防衛研修室戦史室『戦史叢書 一号作戦(一)「河南の会戦」(一九六七年三月、朝雲新聞社、一五六頁)
- (6) 笠原十九司「中国民衆の被害体験の記憶―南京戦場を事例に―」(『歴史評論』第六八二号、二〇〇七年一月、六一頁)
- (7) 引用は岩波現代文庫『太平洋戦争』二〇〇二年七月、二六三、二八七頁からおこなった。
- (8) 成田龍一『証言』の時代の歴史学(富山一郎編『記憶が語りはじめる』二〇〇六年一二月、東京大学出版会、三〇頁)

(おにし やすみつ 三重大学人文学部教授)